SDGs 達成に向けた「日本の祭りと生物多様性保全プロジェクト」教材

美濃和紙と里山のまちづくり

第 1 章　美濃と和紙

美濃まつりとは？

美濃まつりは、「花みこし」「山車」「流し仁輪加」の 3 部からなる八幡神社の祭礼です。1606 年に金森長近 (城主) が城下町を移転した際に、移り住んだ人々と留まった人々が分かれ、各町内が八幡神社に山車や練り物を奉納されていたものが、やがて賑やかなものへと変化していきました。花みこしが用いられる現在の形態になったのは江戸時代の雨乞い行事が起源と言われています。

昨今の美濃まつりは、毎年 4 月の第 2 土曜日と日曜日に開催されています。一連の祭りは、「花みこし」を八幡神社に奉納することからはじまります。花みこしとは、神輿に美濃和紙でできた桜色の花を飾った竹を 300 本近く取り付けたものです。大小約 30 基の花みこしが、掛け声とともに市内を練り歩きます。

翌日の日曜日には、華やかな 6 輌の山車と練り物が市街地に繰り出します。また、両日の夜には「美濃流し仁輪加（にわか）」と呼ばれる風刺劇が街角を舞台に繰り広げられ、街ゆく人々を楽しませています。

出典：美濃市歴史的風致維持向上計画
http://www.city.mino.gifu.jp/pages/54161

美濃まつりの「花みこし」
出典：http://www.mino-city.jp/jp/tourist/festival01.html

美濃まつりの「美濃流し仁輪加」
出典：http://www.mino-city.jp/jp/tourist/festival04.html

美濃地域と和紙

美濃市は、林野面積が 8 割を占める緑豊かな土地です。北西部には長良川の支流の板取川が流れ、豊富な水と里山の自然資源により、古くから「美濃和紙」の生産が行われてきました。その歴史は1300 年にもおよぶといいます。その技術は国際的にも高く評価されており、とりわけ美濃和紙全製品のうちの1 割ほどしか生産されない特級品の「本美濃紙」は、2014 年にユネスコの無形文化遺産「和紙：日本の手漉和紙技術」のひとつとして登録されています。

美濃の古い町並みは「うだつの上がる町並み」として広く知られています。町家の延焼を防ぐ防火壁「うだつ」は、紙の問屋が並ぶ美濃市では、特に大火事対策として重要な役割を果たしました。これが次第に装飾的な意味を持つようになり、裕福な商家などでは競うように立派なうだつが造られるようになったといいます。「うだつの上がる町並み」では、美濃和紙を使った光アートなど、さまざまなまちづくりの取組がおこなわれています。

うだつの上がる町並みと美濃和紙の花みこし
出典：http://www.mino-city.jp/jp/tourist/festival01.html

第 2 章 | 和紙植物と里山

和紙と楮 (コウゾ)

和紙の原料「楮」の木
出典：https://kamikoya-washi.com/

和紙の歴史は長く、奈良時代から木の皮の繊維を使って紙漉きがおこなわれてきました。雁皮 (ガンピ)、三椏 (ミツマタ)、楮 (コウゾ) の木が主な原料です。

美濃で漉かれる本美濃紙の主原料はクワ科カジノキ属の「楮」です。カジノキ属にはカジノキ、ヒメコウゾ、ツルコウゾの 3 種類がありますが、楮はカジノキとヒメコウゾの雑種で、和紙の原料は、カジノキに近いものが使用されます。

楮は本州中央以西の山地、沖縄、朝鮮、中国に分布しています。岐阜県では、標高 900 m以下の県南に多く生育しています。かつては、野生の楮が採取されていましたが、江戸時代頃から紙の需要が増えたことにより、各地で栽培されるようになりました。

和紙づくりでは、冬に刈り取った枝を蒸し、剥ぎ取った樹皮を原料とします。切り株の状態となった楮からは、春に新しく芽が出てきます。樹皮は更に黒皮 (表面の黒い部分) を取り除き内皮の状態にし、水に浸し不純物を取り除きます。煮るなどの作業によりほぐされた繊維を、水とトロロアオイやノリウツギ等の植物の粘液を糊として加えた液体を漉き、脱水・乾燥をすることで和紙をつくります。

出典：和紙植物＿有岡利幸、岐阜県植物誌＿岐阜県植物誌調査会

里山からの恵みと現状

秋の里山（ぎふ清流里山公園）
出典：https://www.kankou-gifu.jp/spot/detail_6893.html

日本では、古くから里山の自然からさまざまな生活維持のための恵みを得ていました。日常的に薪を使用していた時代には、薪炭材として使用されるコナラやアベマキ等の落葉広葉樹を利用していました。

和紙植物の楮も落葉広葉樹です。冬の間に葉を落としますが、春には光合成をおこなうために葉をつくらなければなりません。そのため、葉をつくるための養分を幹や根に蓄えています。この蓄えられた養分により、刈り取られ、株の状態になった楮でも萌芽更新 (伐採した切り株から、芽を育てる方法) をすることができます。萌芽更新をすることにより、原料として適した若い枝を持続的に手に入れることができるのです。萌芽更新は楮に限らず、薪材として使われたコナラなども同様に持続的な利用がおこなわれていました。

しかし、楮の収穫量 (黒皮を付けた状態) は、1965 年は 3,170 トンでしたが、2019 年には 36 トンまで大きく減少しました。和紙の需要が減っただけでなく、楮の輸入も増えており、国内で流通している半数は外国産とされています。また、和紙づくりの糊として使われるノリウツギは、日本全国に自生しているものの、鹿の食害等の要因により大きく減少し、絶滅危惧種に指定されている県もあります。

日本の森林の現状は、スギ・ヒノキの人工林荒廃が大きな問題になっています。落葉広葉樹を含む雑木林の里山復活に向けた取組もありますが、現代的なニーズに合った里山文化の再評価と新たな利用の知恵と仕組み作りを考えていく必要があるでしょう。

出典：里山の生態学_広木詔三
和紙原料の生産状況等について_農林水産省
日本特用林産復興会　https://nittokusin.jp/bunkazai_iji/washi/washi3/

第 3 章　美濃和紙のまちづくり

地域資源

美濃市では、美濃和紙をはじめとする伝統的な文化を活用したまちづくりがおこなわれています。和紙を使ったあかりのオブジェを町並みに展示する美濃和紙あかりアート展 (10 月) などの季節のイベントや、ワイナリーのように和紙をセレクトするお洒落なショップもオープン。市は、「紙屋・川屋保存整備事業」において手すき和紙職人の住居兼作業場である紙屋、川屋の分布図を作成したり、古民家を「美濃手すき和紙の家 旧古田行三邸」として改修し一般公開する等の取り組みをおこなうことで、地域の歴史文化の発信施設として活用しています。

また、美濃和紙を継承していくための「本美濃紙保存伝承事業」や「美濃和紙後継者等支援事業」により、伝統産業である紙漉が支援されています。美濃和紙の里会館もリニューアルされ、多くの観光客を迎えています。

こうした官民協働の取組の結果、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の表彰状に美濃手すき和紙が採用される等の成果が現れ、全国的にも注目されています。

出典：美濃市歴史的風致維持向上計画
http://www.city.mino.gifu.jp/pages/54161

美濃和紙あかりアート展
撮影：古澤礼太（2022.10.22）

和紙専門店「Washi-nary」
撮影：古澤礼太（2021.12.30）

考えてみよう！

Q 1． 美濃和紙から「人と自然の共生」に関するどのような知恵や課題がみられましたか？

A. _____

Q 2． 伝統的な美濃和紙や町並みが現代的にかたちをかえて再評価されています。同様に、里山文化をリバイバルして地域資源化するためにどのような方法が考えられますか？

A. _____

Q 3． ワークショップでは、美濃和紙と里山のまちづくりを学びました。 SDGs（持続可能な開発目標）の17ゴールとのつながりをいくつ見つけることができましたか？

キーワード：
美濃和紙、花みこし、山車、流し仁輪加、楮（コウゾ）、絶滅危惧種、里山、まちづくり、うだつの上がる町並み、Washi-nary、光アート、ユネスコ無形文化遺産「和紙：日本の手漉和紙技術」、など

第４章　ワークショップ開催報告　(2022年11月20日(日)10時00分～16時00分)

美濃まつりと美濃のまちについて学ぼう

2022 年11 月20 日、岐阜県美濃市において「美濃和紙と里山のまちづくり」と題した、美濃まつりをテーマに和紙から考える里山の環境とまちづくりについてのワークショップを開催しました。

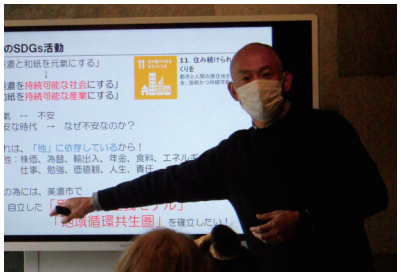
会場である「美濃和紙町屋 WASITA MINO」において、第１部の学びのセッションをおこないました。「美濃祭りの魅力」と題して、講師の豊澤正信氏（美濃市議会議員）の講演、「美濃和紙と里山のまちづくり」と題して、講師の辻晃一氏（丸重製紙企業組合代表理事）の講演がありました。

講演では、美濃市仁輪加連盟会長でもある豊澤氏から、美濃まつりの形態が時代とともに、「町騒ぎ」と呼ばれる雨乞いから、神輿を華やかに飾りつけた花みこしを担ぐ賑わいの場への変化、そして現代のコミュニティとしての役割などお話しがありました。

辻氏からは、美濃のまちにおける人口減少、美濃和紙職人の減少等からこのままでは、まちは持続不可能であり、魅力を掘り起こすまちづくりについてのお話しがありました。

WASITA MINO は、150 年前の木造の古民家を改修して作られたワークスペースです。その会場で、時代とともに変化をしてきた美濃まつりと和紙、美濃のまちとのかかわりについて学ぶことができました。

講演する豊澤氏



講演する辻氏

講師と参加者

美濃和紙について学ぼう

第2 部の体験セッションは、和紙について学び、紙漉き体験ができる「美濃和紙の里会館」を会場とした学びから始まりました。

会館では、参加者が紙漉き体験をしました。楮の繊維とトロロアオイの粘液を水に溶かした紙料を竹簀(タケス：スダレのようなもの) で漉くことで、美濃判(美濃でできた規格サイズ) の和紙を作成しました。楮の枝から削いで表面の黒皮の付いた状態の樹皮や、掘り起こした状態のトロロアオイの根などの解説を聴きながら、美濃和紙がどのようなものからでき、どのように作るかを実際に見て体験をしました。会館に展示してある資料及び、数少ない美濃の楮畑の見学と合わせ、和紙の原料から出来上がるまでの体験や見学により、紙に関する知見や、紙が植物より作られているという実感、紙と美濃のまちの歴史等を学ぶことができました。

その後は、「和紙専門店Washi-nary」を見学しました。和紙の原料問屋だった大蔵を改装した「NIPPONIA 美濃商家町」内にある和紙専門店であり、何人もの職人が漉いた様々な種類の和紙がワインセラーのように展示販売されたお店です。伝統的な製造方法により漉かれた和紙と古い町並みを活かした地域資源のまちづくりを学びました。

紙漉き体験

楮の皮の解説